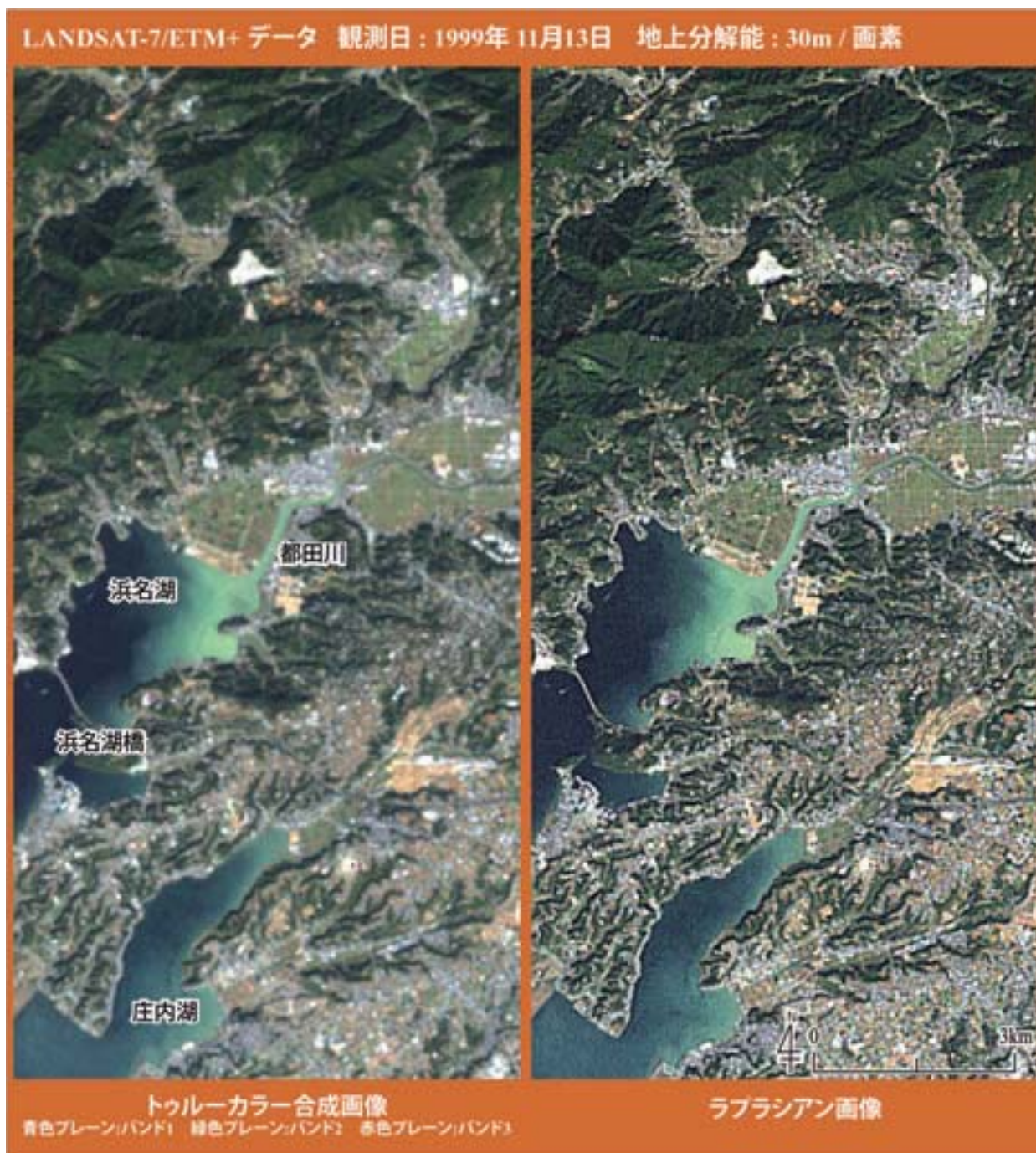


人工衛星LANDSATがとらえた「浜名湖と庄内湖」周辺

データ収集：米国地質調査所 (United States Geological Survey : USGS)

データ処理：東京理科大学・国土情報工学研究会

本誌102号から人工衛星LANDSATから見た「国土の姿」を紹介しています。下図左側は「浜名湖と庄内湖」周辺のトゥルーカラー合成画像（地上分解能30m／画素）です。セマティックマップパーラス(Enhanced Thematic Mapper Plus : ETM+)と呼ばれるセンサから観測された画像です。左側の画像に対してラプラシアンオペレータを通して鮮鋭化処理を施したものが右側の画像です。画像のボケが改善されるとともに、浜名湖橋、畑の区画、道路、尾根線や谷線等、画像特徴としてのエッジや線状構造に対する視認性が向上していることが判ります。浜名湖橋は、橋脚を中心として両側に箱桁を架設するヤジロベエ工法が採用され（鋼橋としては世界初）、1968年に（社）土木学会・田中賞を受賞しています。緩く逆S字カーブを描いている橋の平面線形形状を画像から判読することができます。衛星リモートセンシングデータの多バンド化、高分解能化が進む中、適用分野別に画質改善に関わる要求も異なり、未だ多くの検討すべき課題があると言えます。



過去の「国土の姿を見る」画像集は次のURLでご覧いただけます。 http://www.jacic.or.jp/books/jacicjoho/kokudo/kokudo_index.html